

福井県知事講話

10:25 ~ 10:55



すべての子どもの幸せのために

福井県知事 西川 一誠氏

それでは改めて、福井県の子どもたちの幸せのために福井県がどのようなことを進めているか、また進めようとしているかというお話をさせていただきます。



今回の子ども虐待防止全国フォーラムの準備をいたしておりまして、様々話しているうちに私がお話を申し上げることになりまして、恐縮でございますが、お耳を拝借したいと思います。

今日は、大きな話の流れとしては、1つ目として、福井県の姿、その中には幸福度日本一の福井、そしてふるさとをどのように発展させようとしているか

というお話です。もう1つは、福井県の子育て環境と支援施策がどういうふうな姿になっているかというお話です。その内容として4点ございます。1点目は、3人っ子応援プロジェクト、0歳児の時の育休取得応援、おじいちゃん、おばあちゃんの色々なサポートなど、新たな子育て支援というお話。それから、県民が本当に求めておられる子育て支援としてどういうものがあるか。2点目は、すみずみ子育てサポート、子育てマイスター、あるいは妊娠から子育て期までの一貫した支援というお話。それから、3点目として、官と民との協働、これは企業子宝率というお話。最後に、これは冒頭お話したいと思いますが、支援を要する子どもたちへの応援。ひとり親家庭、発達障害児への支援、そして児童虐待への

対応という話ではありますが、こちらを最初に若干だけ申し上げまして、あとは福井の様々なお話を申し上げながら進めたいと思います。

福井県では、児童虐待について、様々な課題がございますが、全国に比較いたしますとそんなに件数は多い県ではない訳であります。しかしながら、増加傾向がございますので、これはしっかりと児童虐待の問題に福井県として取り組んで参りたいと考えております。

それから、ひとり親家庭の子どもたちへの支援でございますが、ひとり親家庭の子どもたちに対しては様々な特別な応援が必要だと思っております。3年程前から、平成25年度からであります。ひとり親家庭の子どもたちに対し、先生のOBの皆さんたちが、児童の持ち寄る様々な課題あるいは学校の宿題などを教えたりする、そういうサポート場を県内6か所に設置をいたしまして月3回程度実施をしております。

それから、私は毎年、夏休み中に、ひとり親家庭の子どもたちがキャンプをしたり、あるいは臨海学校、色んなことがあるのですが、そういうところに出向きまして子どもたちと一緒にお話などをしております。もう十何年になりますが、かつて小学生であったお子さんたちが中学生や高校生になって後輩たちを応援している。ああ、あんな時ありましたねというような、そんな姿を感じまして大変心強く思っておる訳でありまして、色々と私自身も思うことが多い機会を頂いております。これからも精一杯応援しようと思っております。

それから、発達障害児、発達障害者への支援でありまして、これは「子育てファイルふくいっ子」というシステムを設けております。特別に支援が必要な子どもを早期に把握し、誕生してから就職、そして社会人としてひとり立ちするまでの間、切れ目なく支援するために開発した福井県方式の支援ツールを紹介いたします。

それぞれ応援する組織が年齢ごとによって変わってくる訳です。すると連携が悪くなります。そこで支援機関同士の連携が必要であるということで、25年度からこういうツールを活用した運用をしております。最大の特徴は、色んな行動、また発達において気掛かりな点が色々見受けられる子どもたちについて、総合的に評価をしたり、支援計画のシートを作



成し、乳幼児期、保育所・幼稚園、小中学校、高等学校、就労期と、その内容を引き継ぎシートにより引き継ぐというやり方をもって総合的に応援をしようとしております。こういうことによりまして発達障害児、発達障害者への応援をするという考えであります。

冒頭こうしたことを申し上げた上で、福井県の全体の子育て、幸福度のお話を申し上げたいと思いますので、よろしく願いいたします。

なお、追加して申し上げますと、児童虐待の関係は、全国的には、九州、山陰、東北地方の件数が割合少なく、大都市圏が多い。それから福井県が属する中部圏は比較的少ないエリアという、こういう地域特色がございますので、これはその後、今日行われます遠藤先生の基調講演や様々な分科会でもご議論があると思っておりますが、やはり今問題になっております東京一極集中とか、あるいはそれに伴う地方の疲弊の問題がありましようし、一方、大都市でも集中、人口が集まるけれども、それに応じて幸せ度が高くなっている訳ではないとか、色んな議論がありまして、日本の人口構造というものも究明し解決をしていく問題かなと考えておりますので、併せて付言しておきます。

それでは、冒頭のお話に戻りまして、まず福井県において児童虐待への対応は、逆に申せばいかに子どもたちに幸せになって頂くかという、その大きな政策でありますので、そういう方面からお話をしてみたいと思います。幸福度日本一のお話をいたします。

福井県は、江戸時代、幕末に多くの偉人を出しております。有名なのは由利公正という方ですが、これは五箇条の御誓文を起草いたしてございまして、現

代の日本のファイナンス（財政）を作り出した方です。もし彼がいなかったら明治維新は何年か遅れていたであろうと坂本龍馬などが言っておりますし、彼が福井藩で謹慎を仰せつかった時に救い出しに来られたのが坂本龍馬であります。『竜馬がゆく』という有名な司馬遼太郎の小説がありますが、あれはどこへ行ったかという話は皆さんあまりご存じないでしょうけれども、あれは越前藩に行ったというふうに書いてあるように私は読んでおまして、全文庫で8巻ありますが、最後のところに「竜馬がゆく……越前に行く」と書いてあります。そういう関係の人です。それから、橋本左内というのでも有名です。2年後、大河ドラマ「西郷（せご）どん」というのですか、あそこに必ずこうした由利公正、左内などが出てくると思います。

そこで、もう1人有名な方に橘曙覧（たちばな あけみ）、少し名前が難しいのですが、「たちばな」は橘という字、「あけ」というのは少し難しい、曙という字です。「み」は観覧するという覧という字ですけれども、こういう有名な歌人がおられました。有名といっても皆様はあまりご存じないかもしれませんが、先日、アメリカ大統領選挙がありました。前のクリントン大統領が、天皇皇后両陛下が訪米された時に歓迎式典においてクリントン大統領が日本の精神といいますか、その心を詠った歌にお使いになったのが橘曙覧の歌です。

どういう歌かといいますと、「たのしみは 朝おきいでて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見る時」。朝起きて行くと、昨日はまだ咲いていなかったけど、庭に初めてきれいな花が咲いたなという、そういう自然な歌であります。『独楽吟』というシリーズの中の一首ですが、1人楽しむ歌ということです。楽しみシリーズです。

他にはこんなのがあります。これは今日の子育て、児童虐待といいますか、そういうことに関係しますが、「たのしみは 三人（みたり）の子ども すくすくと 大きくなれる 姿みる時」が1つですね。それから「たのしみは 妻子（めこ）むつまじく うちつどひ 頭（かしら）ならべて 物をくふ時」という歌です。

こうしたお歌をお聞きになったら分かると思いますが、あまり花鳥風月を詠むということではなくて、その時代、非常に珍しいのですが、庶民の生活、さ

やかな喜びとか幸せ、あるいは労働、働く様子を詠った方でありまして、正岡子規が源実朝以来の最大の歌人と『歌よみに与ふる書』で評価している歌人でありまして、こうした精神といいますか、北陸は今日は天候が悪くなって参りましたが、冬の厳しさ、もちろん「物をくふ時」ですからうまいものはたくさんあるのですが、そういう厳しい中で福井県が色々先人たちが営みを続けておる、そういう中で詠われた歌。我々もそういう伝統を引き継ぎながら、幸福度あるいはふるさとというものを追求しようということでもあります。

さて、幸福度のお話に入ります。

幸福度、それぞれ皆さん全国各地からお見えかもしれませんが、順番、ランキングが最近、これはこの順番が絶対というものではありませんし、これだからだめだという訳でもありませんし、素晴らしいとだけ言うのもまた問題かもしれませんが。しかし、65の総合的な指標のもとで47都道府県のランキングを2年ごとにしてしておりますが、福井県は前回に引き続いて幸福度がナンバーワンの県になっております。これは特に、働くこと、それから教育、子育てのランキングが福井県は高いです。2番目は東京都です。1番が福井、2番が東京、3番が富山、4位が長野、5位が石川県ということで、我々北陸と東京と、長野県、そういう感じであります。これは日本総合研究所というところで客観的に調査をしておる訳であります。

また、慶応大学の小林良彰先生が昨年出版した『子どもの幸福度』という別の調査もありますが、この中でも本県が総合第1位になっておる訳であります。

それから逆に、子どもの貧困率というのを、一定の評価を山形大学の戸室先生がやっておられますが、この手は貧困率が低い方から第1位といいますか、最も貧困率がない県だと、こういう評価を受けている訳であります。

後程申し上げますが、色んな原因、理由がある訳でありますけれども、こういう評価を持続させ幸福度を高めるということによって、児童虐待とかそういうものを防いでいこうと、こういう作戦になる訳であります。

なお、これをどう活用するかというのは課題でありまして色々議論がございますが、今回、こ

の日本総研の研究で新しい指標が出ておりまして、あるところへ移り住んだら幸せになれるかというふうな指標を、65の指標を斜め切りにしてこういうデータを幾つか集めてやっています。これも絶対かという、そうかどうかは分からないところはありますが。

そこで、子育て世帯が移住して幸福になれるような県といいますか、これの第1位が何か福井県になってしまったのです。2位は石川県、3位富山県、4位秋田県、5位山形県ですね。全部日本海側になっております。それから、シニア世帯が移り住んだら幸せな県、これは福井県は1位ではないです、残念ながら。これは5位でありました。1位が鳥取、2位が長野、3位が島根、4位が山梨県であります。堀内政務官のご出身のところであります。そして5位が福井県であります。何となく日本の真ん中あたりで日本海側の中央山脈から日本海の方に展開しておるような、そういう姿になっております。こうした数値を上手く子育て世帯の応援に活かさなければ福井県としてはつまりませんし、他の皆さんの県もこうした指標を参考にしながらチェックをしていくということが重要なと思います。

福井県は全国的には、人口ランクでは、A B C DでいいますとDランクぐらいの小さい県であります。県全体のパワーを何とかして高めたいということで、各市町と共にふるさと福井移住機構などというのも設けまして、東京、大阪、名古屋にオフィスを設けて、福井県に移り住んで欲しいというようなことを行っているのであります。

そして、福井県としてはこうした幸福度を活かしながら、今、東京あるいは大阪あるいは大都市の問題、それぞれ課題がありますし、地方も課題がある訳ですが、これを国土政策としていかに活かしていくかということに関心を強く持っております。そうした中で、ふるさと、これをキーワードにして様々な政策を進めることが大事だろうと思うのです。先程色々なランキングを言いましたが、そんなにこのランキングに天と地の差がある訳ではなくて、もっともオリンピックの体操みたいに0.1とか、そんな小さい訳ではありませんが、少しだけ差があるということですから、それぞれが切磋琢磨しながらよいところを伸ばしていくということがこれからの日本にとって大事でありましょう。その時にふるさとと

いう材料が重視されると思います。

皆さん、ふるさと納税はご存じかと思いますが、ご存じですがなされた方がどれくらいいらっしゃるかというのがまた問題ですけれども、返礼品などの話題もあります。ふるさと納税は我が福井県が提唱した制度でありまして、全国の税あるいは寄附制度になっております。発足した時には年間80億ぐらいの寄附額でしたが、今は1,000億を超えている。福島の災害あるいは熊本、色んなところの災害の応援にも使われておりますし、それぞれの県や市町村が頑張っておられると、それを出身者がお世話になっているから応援しようと、そういうような方法に使われる訳であります。そしてふるさと納税との関係。

それから、福井県には「ふるさとの日」というのがありますが、日本全体として「ふるさとの日」とかこういうのを設けて、国民の祝日とする。休日はリラックスしないといけないのですが、何か世の中に役立つというようなタイプの休日があってもおかしくないような日本の状況ですから、そういうものを作ろうではないかというような運動も進めている昨今であります。

また、教育の面ではふるさと教育を重視しておりまして、昨年、福井県の教育振興基本計画を機に、ふるさとに愛着と誇りを持つと。これは皆さんの県それぞれそうだと思いますが、歴史、自然、伝統産業など、ふるさと教育を強化しております。

どんな方法を探っているかということですが、先程由利公正とか坂本龍馬の話がありましたが、「ふるさと福井の先人100人」という教科書のようなものを作りまして、色々な人たちのエピソードとか、子どもの頃こんな子どもだったとか、こんないたずらをしたとか、色々な話を子どもたちに親しんでもらっています。それから福井ゆかりの古典といいますか、そういうものの音読とか暗唱のできる教材を6月に作成いたしまして、これが歴史あるいは広い意味で道徳の教育にも役立つようにしているというようなことでもあります。

例えば、百人一首に福井県のことを色々詠われたりしていますし、皆さんのところにもそれぞれそういう歌があると思います。「わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし」なんていう二条院讃岐の歌というのは、小浜にあ

ります沖の石を詠った歌です。そういうものを小さい時に覚えていただくと。あるいは、紫式部は福井県の越前市武生に1年間、まだ17、18歳の頃にお父さんと一緒にお見えになりましたので、その時のそういう様子とか、そういう色んなことを子どもたちに頭の中に暗唱してもら从中から、ふるさとの考えを身につけてほしいという教育をしようとしております。

それから、子どもたちが、自分の人生と言うと少し大げさですが、人生設計の大切さを学べるようにライフプラン学習の独自教材「私のしあわせライフプラン」を作りまして、6月から、自分がこうしたいとか、こう思いたいというようなことを家庭科の授業で使っているという、こういうこともやっております。

こういうふるさと教育によりまして福井の将来、また自分の将来、自分たちの幸せというのはどういう意味だろうというようなことを考えていただくような教育をして参りたいと思います。

過去の歴史を見ますと、世の中、自然に少しずつ変わっていく訳ですが、意外と変わり具合が速いです。一世代で、30年で物の考え方ががらっと変わっているようなものが多いですから、子どもたちの教育というのは極めて大事だと思います。

それから、福井の子育て環境あるいは支援政策について、次に2番目のテーマとして申し上げたいと思います。

何故福井県が幸福度が高いかということですが、1つは女性の就業率が高い。これは福井あるいは山形などが高いです。全国2位の水準であります。昔から福井の女性は働き者であるという、こう



いう地域環境にあります。さらに三世代同居率が高い。あまり同居すると良いことも悪いこともあるというのも事実でありまして、最近では三世代近居も多くなっている。おじいちゃん、おばあちゃんのお宅、いわゆる実家、それとお父さん、お母さんの家が、車に乗ってせいぜい15分、30分以内というのが福井県の環境でありまして、大体8割以上がそうした環境にありますので、朝、お母さんがお子さんをおばあちゃんの家へ預けて職場へ行って、おばあちゃんはその間に保育所あるいは幼稚園へ預けて、そして夕方帰る時にそこへまた来てくれるという、こういうことで互いに助け合っているというのが福井の教育であります。

そういうことで、福井県の小中学生の学力はトップクラスであります。秋田と並んで大体1位あるいは2位ということになります。最近では、他の県の皆さんも学力向上を目指しておりまして上位争いはかなり厳しくなっているということですから、これも争うだけではあまり良くないのでありますので、実態を良くしなければなりません。

それから、体力テストというのも昔からありますが、これは福井県は断トツ1位です。もっとも、それだからオリンピック選手がたくさん出ているという訳ではもちろんありませんが。例えばバドミントンの山口茜選手、ああいう素晴らしい選手が地元で育ち頑張ってくれるだろうと、次のオリンピックなんかも期待している訳であります。また、1年前ですか、敦賀気比高校が選抜高校野球大会で優勝しましたけれども、日本海側で甲子園で優勝したのは敦賀気比高校しかいないです。まだ他の県では日本海側は優勝できていないです。色んな天候条件もかつてあったのかもしれませんが、そういうことで突破力というのもこれから重要なと思います。

具体的な子育て政策について申し上げますと、新しい政策、それから真に県民が求めている政策、そしてみんなで協力できるような政策を進めることが効果的だろうと思います。

10年程前はあまり行政が子育てとか教育に、よほど大事件が起きた場合でないと関与しなかったです。虐待で大事件が起きると、何かやらなくてはいけないとか国も考えるということでしたが、福井県はもう十数年前から子育て問題、少子化問題を意識していましたので、国に先駆けてやっております。

1つのポイントは、3人っ子応援プロジェクト。2人までは皆さんお子さんをお産みになることは多いですが、3人というのはちょっと躊躇するので、3人をお産みになる時に全精力を挙げて応援をするというのを全国に先駆けて導入しました。今、これは非常にポピュラーで、こんなことをしない県はほとんど今はないのではないかとこのように思います。我々の政策が追いつかれてしまったというのが実際かもしれません。そういう状況であります。

それから、最近新しく0歳児の応援です。0歳児あるいは1歳児というのは、お子さんにとっても、お母さん、お父さんにとっても家庭で面倒を見てあげるのが一番だと思います。それは保育所もそうです。0歳児の方がたくさんお見えになると保育士をたくさん雇用しなければなりません。これは大変なことですし、財政的にも限りがありますので、バックアップして、0歳児、1歳児をご家庭で育児をしていただく。お母さんたちが仕事を休まれた時に、その雇用をしている企業に応援をして、会社がお母さん、お父さんたちが休みを取りやすいようサポートする。そうすることによって、またもとの条件で復職をされると、こういうことを数年来始めているのが福井県のやり方です。さらに、おじいちゃん、おばあちゃんと近居というお話をしましたが、祖父母の孫守りとか孫育てで、共働きをしているお母さんたちにもおじいちゃんもおばあちゃんもいらっしゃる訳ですので、そうした休暇取得に対する応援などもしております。

それから、具体的に育児をする場合に、お母さんたちが風邪をひいたりしてお手伝いしてほしいなどということがあるかと思えます。先週、香港とかシンガポールへ行ってきましたが、あそこも共働きが多いです。シンガポールの場合、ほとんど共働きです。どうしておられるかという、フィリピンやタイや色々な国の人たちのヘルパーを雇って共働きしています。福井県の場合には、家族、おじいちゃん、おばあちゃん、三代目みんなで支え合っているという、そういう環境にあるというふうに思えます。そこで、すみずみ子育てサポートということで、少しの間子どものお世話をしてほしいとか一時預かりをしてほしいという時に、シルバー人材センターなどに、単価は約700円ですが、そういうものを市町と半々で応援して少し預けておくとか、そういうやり方をし

ております。

それから、子育てマイスターという制度を作っております。保育士、看護師さんなどがみんなで子育ての応援をする。今は約500名近くこういう方がおられる訳であります。

また、このことに関連いたしますが、企業子宝率という言葉を使っています。これは普通、合計特殊出生率ということで女性だけのことを何か関心を持っていますが、それはそれで大事ですが、ある会社で、私の会社がこうあるとします。私は社長だとしますと、社員の方がたくさんおられますが、それぞれ女性が何人お子さんを持っておられるか、男性のお宅も何人お子さんを持っておられるかという、それぞれの社員1人の子宝が何人かという合計を男女ともする訳です。その会社自体がいかにか子育てをしやすい会社であるかという、そういう指標、企業子宝率というのを東洋レーヨンの経営研究所の渥美由喜さんのアドバイスも得て今調査をし、こういう応援をしています。従業員の働きやすい企業は大体企業子宝率が高いことが判明をいたしております。そして高い子宝率の企業を子育てモデル企業として認定し、紹介、応援をしていると。広げていこうということであり

ます。この企業子宝率は、子ども・子育て白書（平成24年版）、また厚生労働白書（平成27年版）にも取り上げられまして、既にこの福井県の制度が三重県や鳥取県など9県に導入をいただいています。

以上、幸福、ふるさと教育、そして子どもの応援、色々なお話を申し上げたところであります。

冒頭紹介しました橘曙覧の歌に、次のような歌がまた一つあります。これは橘曙覧さんが5人家族でいた頃の歌だと思えますが、幕末であります。「たのしみは 家内（やうち）五人（いつたり）五（いつ）たりが 風だにひかで ありあへる時」という歌があります。家族が健康でいかに幸せかというのを願っていた歌だと思えます。でも、当時は橘曙覧さんのお子さん、女の方は3人いましたが、長女、次女はすぐ亡くなりましたし、三女も天然痘で3歳で亡くなっております。息子さんは3人生きられたということになっております。昔は多産多死の時代でありました。

この天然痘というのも、福井県の笠原白翁という

有名な幕末のお医者さんが、長崎の種痘の種を大阪、京都へ引き継いで、冬の敦賀の岬、親と子ども、種が切れるといけなかったものですから、雪の中を踏破して福井県に持ち込んで、幕末、福井県の天然痘、子どもたちがそれで死ぬということがなくなったという物語があります。これは、津村節子さん、福井県の芥川賞作家で、先日、文化功労賞を受けられま

したが、この人のご主人であります吉村昭さん、小説家であります。その吉村さんの小説にその感動的な場面が書いてありますので、是非機会がございましたらご一読を願いたいと思います。

以上で私からのお話を終わりたいと思います。
ありがとうございます。

